

## ●大隅国分寺の再検討

大隅国分寺跡は鹿児島県霧島市国分中央1丁目23-1794、旧国分町の市街地のど真ん中にある。



第1図 大隅国分寺跡の位置

(「大隅国分寺跡の位置」を参照)

国分の市街地は、関ヶ原の合戦に敗北した島津義久が、1604年に新たに築いた城・舞鶴城と城下町がもとになったものである。

市街地の一番北にある国分小学校が旧御殿跡で、その北にある標高192.6mの城山と呼ばれるところが詰め城。その南側に基盤の目状に作られた街路で区切られて城下町が作られた。この近世城下町がそのまま継承された市街地だ。

この市街地は、標高8～11mの微高地に作られ、市街地の街路の方位は東偏30度である。

この旧御殿跡の西100mほどの所に、北辺30m、東辺60mほどの長方形の区画が大隅国分寺跡であり、旧国分寺の遺構としては、その西北中央付近に六重の多層石塔と半身の石製仁王像などが残されている。

明治初年において廃仏毀釈によって寺院が廃絶したときの状況は、この長方形の地の北側が国分寺で、観音堂が一つと石塔のみの小さな草庵であり、南側が墓地であった(『新修国分寺の研究』所収の「第八大隅」論文などによる)。



(「大隅国分寺跡石塔」を参照)

『新修国分寺の研究』所収の「第八大隅」論文では、この国分寺跡の考古学的調査はなされておらず、確認できるのは、前記の六層の石塔の三層に「康治元年壬戌十一月六日」の銘があり、このころまで存続していた国分寺であるが木製の塔を失い、康治元年、すなわち1142年にその再興を願って建てられたのがこの石塔ではないかと論じている。

さらにこの地が大隅国分寺跡に違いないと断定する根拠は、この地で採集される古瓦であり、その軒丸瓦の瓦当文から奈良時代後期の特徴を持っていると判断できるからである。

その後調べてみると、昭和56年と62年に緊急発掘がなされ、さらに国分寺跡の範囲確認のために、平成11年度から13年度まで霧島市教育委員会が鹿児島県教育委員会の協力を得て考古学調査をしたことが確認される。

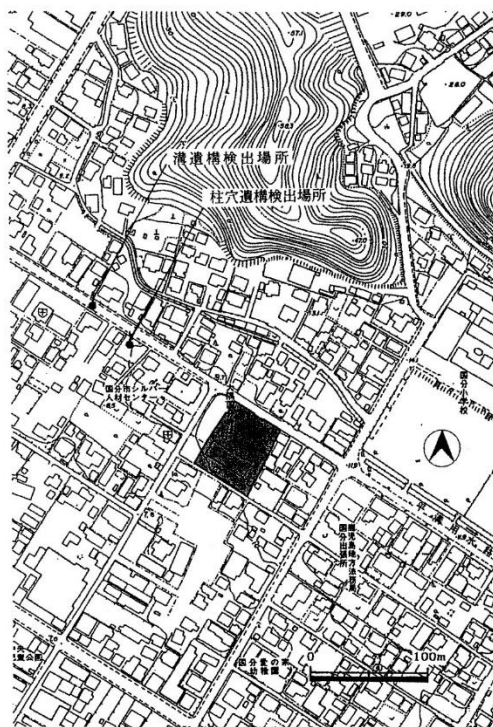
しかしこれらの調査の報告書はネットでは公開されていないが、鹿児島県文化振興財団「上野原縄文の森」が公開している文書「大隅国分寺跡」<https://www.jomon-no-mori.jp/old/sensikodai/319.pdf>

に、発掘の成果の概略が記されているので、これに基づいて考察する。

## 1：伽藍について

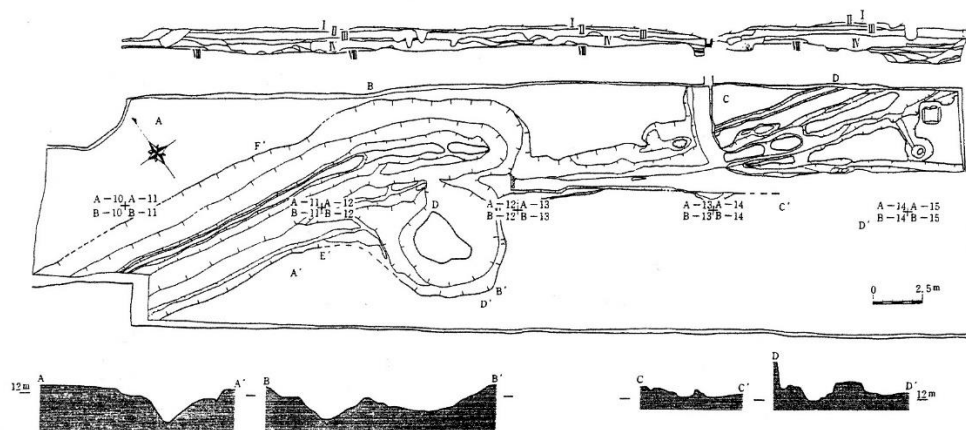
大隅国分寺に関する遺構として出てきたものは、その寺域北限と見られる「溝遺構」と、この溝近くで出土した「柱穴列」だけである。

(「大隅国分寺跡周辺地形図」を参照のこと)



第3図 大隅国分寺跡周辺地形図

溝遺構は、昭和62年の調査で出土した。大隅国分寺跡の北西150mほどの所だ（鍛冶屋馬場遺跡）。



第2図 溝遺構・土坑実測図

溝1は幅5.6m、深さ2.0mの規模で遺構断面図からわかることはV字型をした薬研堀と呼ばれる形式の溝である。そして溝2は幅0.8m、深さ0.9mの規模で、断面図からはU字型の溝である。最後にこの溝2に並行して走る溝3は、幅0.4m、深さ0.25mであった。

どちらの溝も方位は東偏10度。

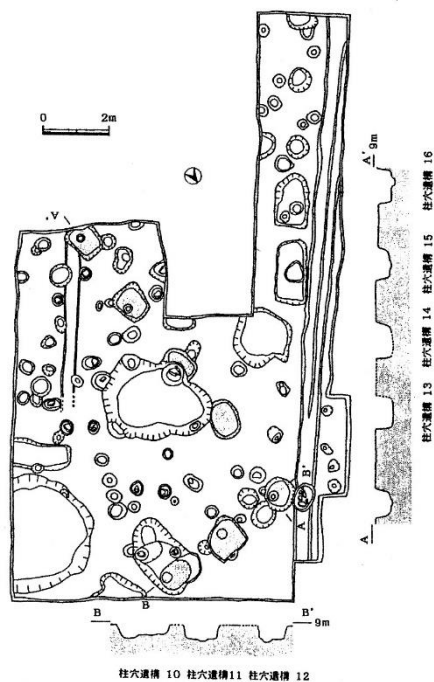
この溝はさらに、平成11年から13年の確認調査でさらに西に延びていることが確認され、寺域北限の溝とされている。

しかしV字型の薬研堀の溝は中世から江戸時代に特有な溝なので、これは古代の寺院の北限溝という判断は当たらないと思う。図にあるように溝のすぐ横に接続する形で、径6.2m、深さ1.1mの土坑があり、これはため池と考えられるので、溝1は水田や畑を潤す感慨水路と思われる。古代の寺院北限と見るべきはU字型をした溝2の方であろう。

この溝の方位は先に見たように東偏10度で、島津義久によって作られた近世城下町の東偏30度とは異なるので、確実に他の時代の遺構である。そして古代の寺院や官衙を取り巻く区画溝の特徴は底がU字型であることに鑑み、溝2をどの時代とは確定できないが、すぐ東南にある国分寺の北限区画溝と考えることは可能である。

どの溝からも底から見つかる遺物の大部分が布目瓦であるとのことだから、古代の国分寺が廃絶した後で掘られた溝という可能性もある。大隅国分寺は何度も廃絶しては再興されているので、この幾度かの再興時の北限区画溝とみることもできる。

そしてもう一つの遺構は、平成11年から13年にかけての確認調査で見つかった、柱穴列だ。



第4図 柱穴検出状況

この文書では、当初はその位置から寺院食堂跡ではないかとの想定で調査したが、当時の国分寺食堂に該当しないと、目的はわからないが国分寺の建物の一つとしている。

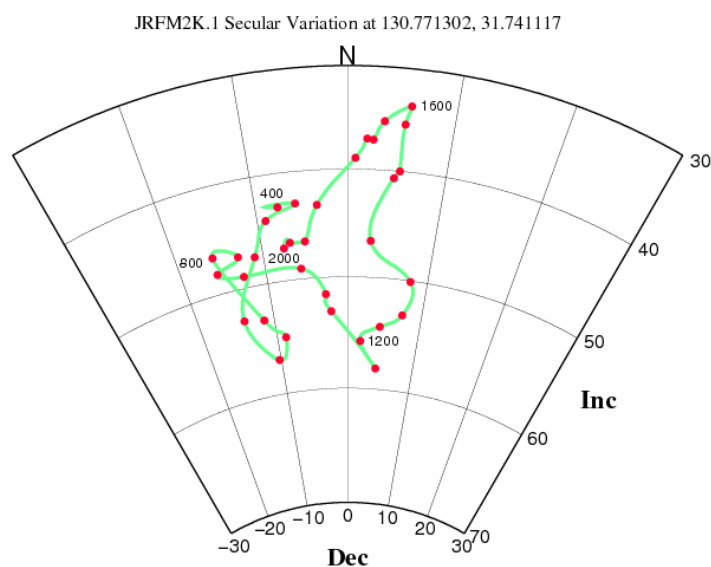
遺構図を見ると、東西2間以上、南北4間以上の規模の掘立柱建物である。この建物の方位は真北、正方位で建てられた建物である。

以上の二つの遺構からわかることは、北限溝遺構からは、大隅国分寺の前身寺院として、東偏の寺院があったのではないかとの想定が可能である。つまり大隅国ができたのは、713年和銅6年に、日向国から、肝坏(きもつき)、嚙啖(そお)、大隅、始(あいら)の4郡を割いて建国したことに始まり、その後嚙啖郡より桑原郡を分出し、さらに755年天平勝宝7年には菱刈(ひしかり)郡をその北に新設し、824年天長元年には多嶺島(たねのしま)を廃して大隅国にあわせ、熊毛(くまげ)、馭謨(ごむ)の2郡を置いたことに始まる。

大隅国府と国分寺が置かれた場所は桑原郡であるから、ここにはここが日向国の嚙啖郡であった時代のなんらかの役所と寺院があった可能性がある。そしてこれらは近畿王朝の前の九州王朝時代に遡る可能性もあるから、この九州王朝時代の寺院の北限溝である可能性が示されるわけだ。

ただし先に見たように、国分寺は何度も廃絶しては再興された。

『新修国分寺の研究』所収の「第八大隅」論文によれば、最初の廃絶は平安末期から戦国末期の間。天文年間に隣接した村・清水村の寺院の住職がその末寺として再興したとの記録がある。天文年間だから1532年から55年、後に見る磁気偏角(磁北が真北からずれる角度)永年変化表で確認すると、このころのこの地の磁気偏角は東偏であるので、この戦国末期の再建の際の北限区画溝と見ることも可能である。



(「大隅国分寺付近磁気偏角変遷図」参照)

また正方位の柱穴列＝掘立柱建物からわかることは、当初は東偏で作られた寺院が、いつの時代かに正方位で建て替えられた可能性を示すのだ。

正方位で寺院が建てられたのは、九州王朝時代の 6 世紀末から 7 世紀初頭、次は近畿王朝時代の 8 世紀になってからのこと。正方位の掘立柱建物は、このどちらかの時代に属する可能性がある。前者なら葺かれた瓦は素弁蓮華文軒丸瓦。後者なら、この地で多数採集される、平城宮系の単弁蓮華文軒丸瓦である。

さらに 2021 年 4 月 3 日の新聞によれば、大隅国分寺跡に残された六層の石塔を解体修理する工事に際して、石塔の直下から、木造塔の心柱を支える塔心礎とその他の礎石が見つかったことが報じられている。

この発見は 2 月末に終了した石塔の修復作業中のこと。塔心礎は楕円形で最長部の直径は約 1.5m で、中心に柱を置く穴と見られる直径 27 cm 深さ 7 cm の穴が開いていた。



石塔の下から発掘された木造塔の礎石（中央）＝霧島市国分の大隅国分寺跡  
(霧島市教育委員会提供)

(「大隅国分寺塔心礎」を参照)

この塔心礎などの礎石は発掘状況から、元の場所から移動したものと判断されて掘り出されて移動された。残念ながら元あった場所はわからないが、元の木造塔が何らかの原因で失われたあと、塔再建を願って六層の石塔が建立され、さらにその地下に塔心礎などの礎石を埋納したのではないかと考えられている。

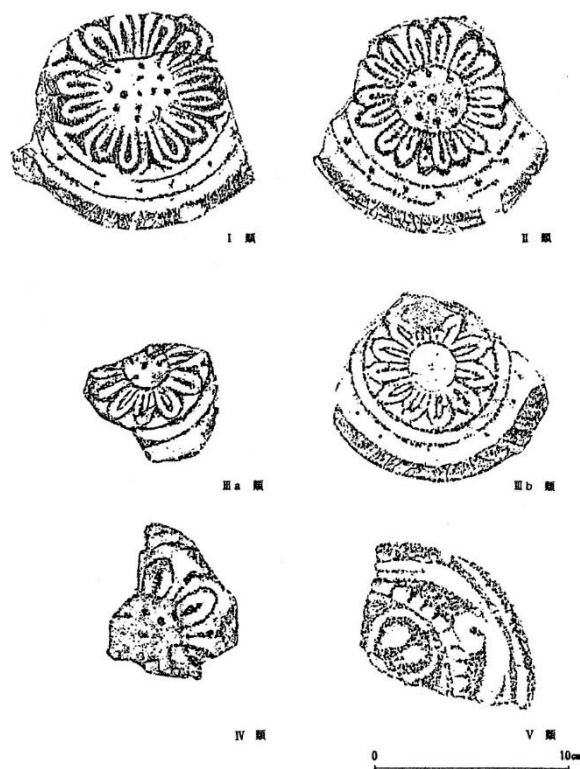
この塔心礎の大きさと柱穴の直径から、木造塔の大きさはあまり大きなものではないことはわかっている。

大隅国分寺を物語る遺構は以上の通り。

まだまだどのような伽藍であったかは五里霧中の状態である。

## 2：出土瓦からわかること

先の文献には、出土瓦の分類図も掲載されている。



第6図 軒丸瓦分類 (拓影)

(「大隅国分寺軒丸瓦分類」を参照)

全部で5種類の軒丸瓦が確認されている。

I類からIV類までは、蓮華文軒丸瓦の蓮花卉の形が細長い形態から、平城宮瓦の系譜を引

く、単弁蓮華文軒丸瓦ではないかと思われる。この文様からは 8 世紀中葉から後半が想定できる。また V 類は、蓮花の外側に巴文が彫られていることから、これは平安時代、つまり 9 世紀以降の瓦であることがわかる。

この出土瓦からわかることは、寺院創建は聖武詔の出された 8 世紀中葉以後、その後平安時代までは存続したことは確実である。

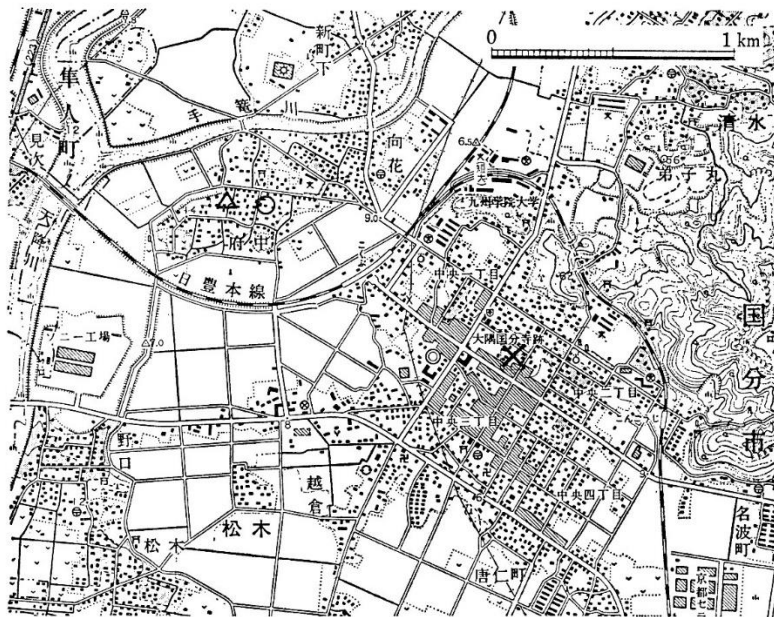
だが先にみた寺院北限溝が東偏であることを考慮すると、8 世紀中頃の瓦よりも古い、7 世紀代の瓦がまだ土中に眠っていることも想定できる。

先に見た長方形の史跡に指定されている区域はおそらく大隅国分寺の寺院中枢域であろうが、この地域は瓦の表面採取はなされたが、本格的な考古学調査はなされていない。大隅国分寺の全体像を明らかにするためには、周辺の地区の調査だけではなく、この史跡に指定された地区の本格的調査が望まれる。

### 3：国府との位置関係

大隅国府は、大隅国分寺跡の西 1 km ほどにある国分府中町がその地として想定されている。ここは国分寺跡のある台地の西方で、間に低地を挟んで対峙する台地で、現在はこの台地の北から西側を流れて天降川に合流する手籠川が、昔は台地の東側を流れてそのまま直接鹿児島湾に注いでいた。

この川の痕跡は地図をみてもわかる。



第 205 図 大隅国分寺附近地形図 (×は国分寺址, ○は国府, △は尼寺推定地)



(「大隅国分寺付近地形図」を参照)

国分府中の町がある台地のすぐ南側で日豊本線の線路の北側の地は、府中の町と同様に東偏 3 度の街路や畦道となっている。しかしその南の田園地帯は西偏 5 度の街路や畦道となっており、この地区の東に接する国分の市街が東偏 30 度となっていることと大いに異なる。

そして国分市街のすぐ南の旧田園地帯の街路や畦道は東偏 25 度で、二つの地区が交わる場所から南、鹿児島湾に至る地域の街路や畦道は正方位となっている。

おそらく手籠川は、府中台地と国分台地の中間を南進し、西偏 5 度と東偏 25 度の旧田園地帯の境を南下して、そのまま正方位で区画田園化された地域を通過して鹿児島湾に至っていたものと思われる。

この府中台地と周囲の田園が東偏 5 度で整地されていることは興味深い。

「第八大隅」論文では国府が置かれたと想定される台地もまったく考古学調査はなされず、府中の中央に鎮座する公守神社周辺が国府で、その西に古瓦の出土する台地の西端の地付近が国分尼寺のあった場所と想定されていると記している。

国府の西に尼寺が隣接し、国分寺は間に川を挟んだ 1 km 東という想定もこの論文が記すように不自然である。

むしろ府中台地には、もともと九州王朝時代に何らかの東偏の官衙が設けられ、近畿王朝時代になってここが日向国から分離独立し、この地に日向国府が作られるに際して、府中台地は狭いので、その東のより広い国分台地にも何らかの東偏の官衙や寺院があったので、ここに、新たに国府と国分寺・国分尼寺が正方位で隣接して作られた。だがいつの頃か、府中との地名は室町時代に国府があったことを示す地名なので、室町時代に後に府中と地名が付いた地に、国府が移動したと考えた方が妥当と思われる。

この場合には、元々の国府は国分寺のすぐ東にある国分小学校、そして国分尼寺は国分寺のすぐ北側ではないだろうか。

国分寺跡の西 1 km ほどに「向花」という地名がある。

国分尼寺は、大隅法華滅寺と近畿王朝時代には呼びならわされていたので、法華寺と通称されていた可能性がある。この「華」の字が「花」に転化し、法華寺に向き合った地として「向花」という地名ができた可能性がある。

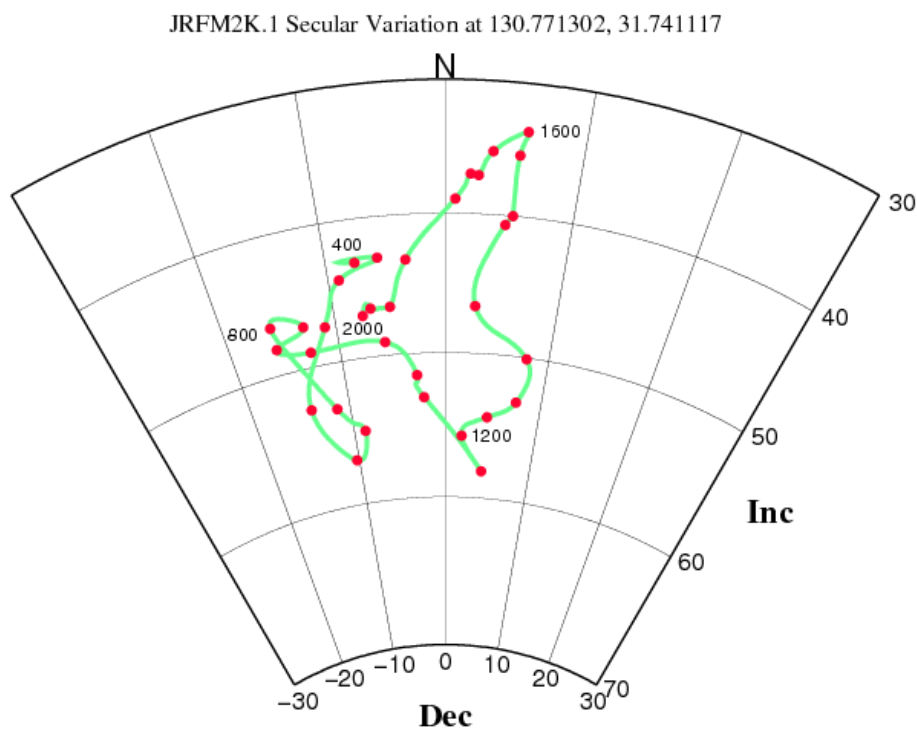
こう考えると国分尼寺は国分寺跡のすぐ北 500m ほどの九州学院大学南の広い空き地に想定できる。

そして府中台地が東偏 5 度で整地され、国分寺北限とされる溝が東偏 10 度であったことは、これらの役所や国府と国分寺とされる遺構が、6 世紀中頃の九州王朝時代の何らかの役所か評衙と評寺であった可能性を示すものと言わざるを得ない。

なお国分の市街地が東偏 30 度で作られていることは、1604 年にこの城と城下町が作られた時代の磁石の北は、正方位に対して東偏であったことに由来するものと思われる。

ちなみに、岡山大学の日本考古地磁気データベース、<http://mag.ifst.ous.ac.jp/>による地磁気永年変化モデル(JRFM2K.1)による計算結果では、1604 年の磁気偏角は 5.7 度である。古代の窯跡などで出土する焼土などから算定した古代磁気偏角の復元であるから、実際の数値とは異なるが、1604 年に国分の市街ができた当時の磁石の指す北が、東に偏っていたことは確認できる。

またこのシステムによって、聖武詔が出された 741 年のこの地の磁気偏角を算出すると、それは西偏 11 度。そして西暦 400 年から 2000 年までの磁気偏角の永年変化を見ればわかるように、ここに寺院が作られたと想定できる 6 世紀から 8 世紀の時代は磁気偏角は西偏であり、こうした時代にこの地に、東偏や正方位で寺院を作ることは、磁石に頼った設計ではない、政治的な意図があったことを示すものと思われる。



(「大隅国分寺付近磁気偏角変遷図」を参照)

大隅国分寺の再検討は以上である。

2021 年 5 月 30 日